



午五山遺跡

史跡指定記念特別展

弥生時代の環濠集落

午五山遺跡を掘る



平成25年9月7日(土)～29日(日)

■時間 9:00～17:00 ■入場料 無料

■場所 和光市民文化センター(サンアゼリア) 展示ホール
(埼玉県和光市広沢1-5)

和光市教育委員会

午王山遺跡史跡指定特別展

「弥生時代の環濠集落 午王山遺跡を掘る」開催にあたって

午王山遺跡は昭和54年にはじめて発掘調査が行われて以来、これまでに15回の調査が行われてきました。その結果、午王山全体を囲うように環濠がめぐらされていることが確認され、埼玉県内でも有数の弥生時代の環濠集落であることがわかってきました。

今回の特別展示は午王山遺跡が和光市指定文化財（記念物・史跡）に指定された記念として、主に発掘調査の成果から午王山遺跡を振り返ります。午王山遺跡の世界をぜひご覧ください。

今回の展示が午王山遺跡を知る機会となり、さらには文化財に対する関心を深めていただくきっかけとなれば幸いです。

なお、本展の開催にあたりご指導、ご協力を賜りました関係各位の皆様には厚く御礼申し上げます。

平成25年9月

和光市教育委員会

目次

- | | |
|------------------|--------------------|
| I 市内遺跡の概要と午王山遺跡 | V 午王山遺跡と弥生土器 |
| II 午王山遺跡のこれまでの調査 | VI 午王山遺跡と不思議な遺物 |
| III 環濠集落と午王山遺跡 | VII 中世の板碑と午王山遺跡 |
| IV 発掘された午王山遺跡 | VIII 午王山遺跡と新羅王居跡伝承 |

- 例言 -

1. 本冊子は午王山遺跡史跡指定特別展「弥生時代の環濠集落午王山遺跡を掘る」の展示パンフレットです。

2. 本展は和光市教育委員会が主催するものです。

3. 展示構成、展示内容と本パンフレットの内容は同一ではありません。

4. 展示会場と展示期間は次のとおりです。

和光市民文化センターサンアゼリア展示ホール

平成25年9月7日（土）～29日（日）

5. 会期中に記念講演会、関連講座を次のとおり開催します。

【関連講座】

9月7日（土）「午王山遺跡の発掘調査について」鈴木敏弘（大東文化大学講師・和光市文化財保護委員）

「午王山遺跡と新羅王居跡伝承」宮重交二（大東文化大学文学部准教授）

【記念講演会】

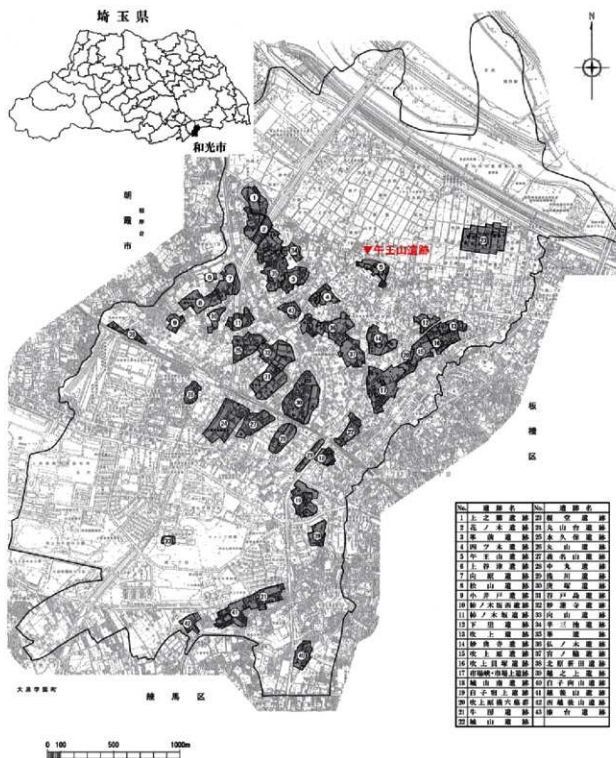
9月15日（日）「弥生時代の関東」石川日出志（明治大学文学部教授）

6. 展示パンフレットの作成は和光市教育委員会生涯学習課文化財保護担当鈴木一郎・中岡貴裕が行いました。

I 市内遺跡の概要

埼玉県和光市は埼玉県南西部の荒川右岸に位置し、北は戸田市、西は朝霞市、南は東京都練馬区、東は東京都板橋区と隣接しています。和光市の地形は市の北部を流れる荒川により形成された沖積低地(荒川低地)と武蔵野台地北東端にあたる洪積台地とに分けられます。低地部の標高は5~6m、台地部の標高は27~40m程で南の台地奥へ行くにつれて高くなっています。

現在和光市内で確認されている遺跡は43箇所あり、低地に位置する榎堂遺跡をのぞいて全て台地上に位置しています。市内の遺跡からは旧石器時代から近世までの遺構や遺物が確認されています。



Ⅱ 午王山遺跡のこれまでの調査

午王山遺跡はこれまでに15回の発掘調査（うち一回は保存目的の範囲内用確認調査）が行われ、旧石器時代から中・近世までの遺構・遺物が確認されています。特に弥生時代の住居跡は弥生時代の中期後半から後期後半のものまで150軒程度を数えており、また一時期には午王山一帯に環濠をめぐらした「環濠集落」として機能していたことがわかってきました。



県立和光高校

午王山遺跡

午王山遺跡第2次調査航空写真（昭和56年撮影） 青い実線：検出された環濠 青い破線：環濠推定線



午王山遺跡第4次調査風景



午王山遺跡2次調査遺構検出状況

【発掘調査とは】

発掘調査とは、土地に埋蔵された遺構と遺物の存在やその相互関係を正しく理解するため、考古学的な手法に基づき行う調査のことをいいます。

午王山遺跡第2次調査は昭和56年に行われました。午王山遺跡全体を横断するように行われたこの調査によって、午王山遺跡が弥生時代の環濠集落であることが明らかとなりました。

Ⅲ 環濠集落としての午王山遺跡

午王山遺跡は弥生時代の環濠集落として知られています。

「環濠集落」は、簡単に言えば「環濠」と呼ばれる溝によって囲われた集落のことをさします。環濠を作った目的は諸説ありますが、一般的には集落を外敵から守るためにつくられた溝であると考えられてきました。

午王山遺跡の発掘調査では2条ないし3条の環濠が確認されており、弥生時代の一時期には集落に環濠がめぐっていたことがわかりました。



環濠を掘削する様子



午王山遺跡の「環濠」の深さ



4次調査で検出された2条の環濠



13次調査で検出された3条目の環濠



環濠とその上に構築されていた住居（4次調査）

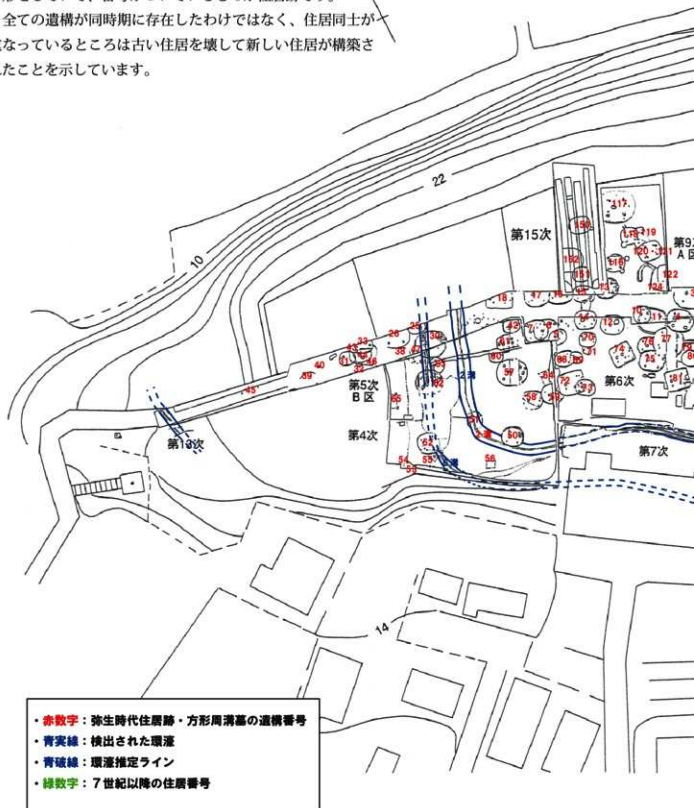


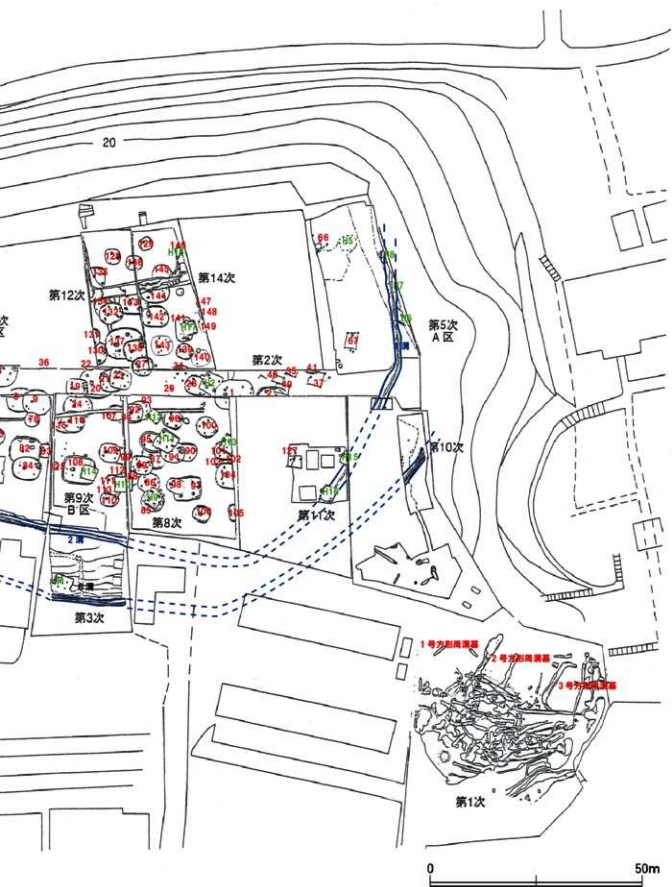
環濠の中から断面を見た状態

IV 発掘された午王山遺跡

午王山遺跡で確認された遺構の配置図です。丸い形や四角い形をしていて、番号がついているものが住居跡です。

全ての遺構が同時期に存在したわけではなく、住居同士が重なっているところは古い住居を壊して新しい住居が構築されたことを示しています。





5次調査遺構全体配置図

V 午王山遺跡と弥生土器

発掘調査をすると、たくさんの土器が出土します。こうした土器は時代や地域によって特徴があり、考古学の世界ではその型式に注目することで、時間軸・空間軸を把握していきます。

午王山遺跡も発掘調査によって多くの土器が出土していますが、その成果から地域的には中部高地系の土器、東京湾岸系の土器、東海系の土器などが見つかっています。

ここではその一部をご紹介します。

<弥生時代中期末葉から後期初頭>



6号住居跡出土



87号住居跡出土



3

72号住居跡出土



4

【中部高地系の特徴を持つ土器】

3～7は中部高地系の櫛描文様を持つ土器です。

櫛描文とは3～4本程度の篠竹を束ねたものを押しあてて施文されたものをいいます。

波形の波状文や押し引きを繰り返して施文された縞状文があります。

<弥生時代後期初頭から後期前葉(1)>



5

108号住居跡出土



6

97号住居跡出土



7

105号住居跡出土

<弥生時代後期初頭から後期前葉（2）>



8

第74号住居跡出土土器



9

137号住居跡出土土器

【東京湾岸系の特徴を持つ土器】

8の壺に見られるような山形の文様や、9の甕に見られるような粘土紐を輪で積み上げたような痕跡を持つ特徴を持つ土器です。午王山遺跡では数は多くないものの確認されています。

<弥生時代後期前葉から後期中葉>



10



11



12



13



14



15

2号溝出土

【東海系の特徴を持つ土器】

午王山遺跡からは、近隣の市町村と比べても東海系の土器が多数出土しているといえます。中でも菊川式と呼ばれる土器の特徴を有するものが多く確認されています。

10～15は全て環濠（2号溝）からの出土で、10～13は壺、14は台付甕、15は鉢です。

VI 午王山遺跡と不思議な遺物

午王山遺跡からは、土器だけではなく色々な遺物が確認されています。

ここでは午王山遺跡で出土した銅鐸形土製品と、午王山から出土したといわれている珠文鏡をご紹介します。

<銅鐸形土製品>

銅鐸形土製品とは、近畿地方の弥生時代を代表する遺物である銅鐸を模倣した小形の土製品です。用途は諸説ありますが、「祭具」として使用されていたと考えられます。

関東地方での出土例は多くはないことに加え、同一の集落跡から3点も出土していることは珍しい事例といえます。



銅鐸形土製品（上段：真上から撮影。下段：正面から撮影。）

<双角有孔土製品>

午王山から出土した双角有孔土製品は、キツネのような形をした土製品です。

用途はよくわかっていないのですが、午王山遺跡からは数点出土しています。



双角有孔土製品

<伝 午王山遺跡出土珠文鏡>

この珠文鏡は午王山のふもとに位置する個人が所蔵しているものです。

現所有者によれば、「祖父が裏の午王山で掘り出したと聞いている」とのことであり、納屋にしまわれていたそうです。発掘調査による出土品ではなく、出土位置も伝承が伝わるのみで明確ではないことから確実に午王山遺跡出土とは言い切れません。そのため「伝 午王山遺跡出土」としています。

今回の展示にあたって調査した結果、この珠文鏡は古墳時代前期半ばごろのものと考えられます。



拓影



現物写真



X線写真

「伝 午王山遺跡出土珠文鏡」拓影・現物写真・X線写真

Ⅶ 中世の板碑と午王山遺跡

午王山遺跡第1次調査では、板碑と呼ばれる中世の石像物が大量に出土しました。当時の様子が偲ばれる好例であるため、平成19年度に和光市指定文化財に指定されました。

このほか、午王山遺跡第1次調査では中世のお墓である火葬墓の跡も検出されています。

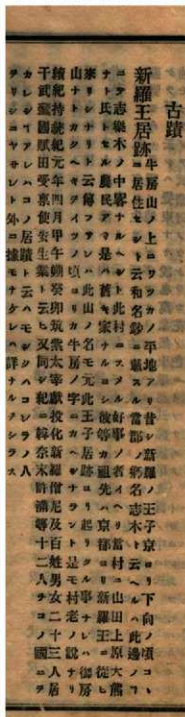


第1次調査出土板碑群出土状況

VIII 午王山遺跡と新羅王居跡伝承

午王山遺跡には「新羅の王（子）が住んでいた」という伝承が残されています。この伝承は、江戸時代に幕府が編纂した地誌『新編武蔵風土記稿』の上新倉村を記載する中に「古跡 新羅王居跡」という項目があり、そこに午王山（牛房山）が新羅の王子の居跡であったという旨の内容が記されていることに由来するものです。

これまでの発掘調査では、8世紀代の遺物はわずかに確認されているものの、新羅王居跡と断定できるような遺構や遺物はまだ確認されていません。しかし、少なくとも江戸時代には地元の人々から午王山が特別な山であると認識されていたのでしょう。



『新編武蔵風土記稿』（明治17年出版）
上新倉村のうち「古跡新羅王居跡」の部分抜粋



『新編武蔵風土記稿』新座郡（明治17年出版）
新編武蔵風土記稿は、江戸時代に幕府によって編纂された地誌である。明治時代になって需要が高まったことを受け、明治17（1884）年に内務省地理局によって出版された。写真は出版された『新編武蔵風土記稿』で、表紙の色から通称「赤本」と呼ばれる。

平成25年度午王山遺跡史跡指定記念特別展
「弥生時代の環濠集落 午王山遺跡を掘る」パンフレット
発行 平成25年9月7日
編集・発行 和光市教育委員会